

「国内亡命文学」試論

横塚祥隆

国内亡命<sup>(1)</sup>及び国内亡命文学については、すでに様々に研究され、もはや新たな成果はえられないという指摘<sup>(2)</sup>があり、またそれがはたして亡命や亡命文学と比肩しうるような反ファシズム、反ナチ抵抗文学と見なしうるかについても種々の立場から検討されて来ている。さらにはこの奇妙な表現をもった概念及びそれが示す現象についても多くの議論が展開されており、それらすべては「小図書館が出来てくくらいであるが、今日にいたるまでこの概念は解明されていない<sup>(3)</sup>」といわれている。筆者はもとより、その解明を志す者でも、新たな展望を獲得しようとするものでもない。ただ、この問題に興味と関心を抱いて来たものとして——もつともその興味は筆者のドイツ・キリスト教文学に対する関心から、ことにその第三帝国時代のありかたに対する関心から派生したものに過ぎないが——いささかの整理をしようとする「私論」であり、かつまたひとくくべき文献、資料はあまりにも多く、その森の中に踏み迷う虞なしとせず、「試論」とする所以である。

## (一)

いま黙っていることは幸せ、

日々の恥ずべき名声から離れているのは快く、

かげのなかに住むのは晴れやか

忘れられることは恵み 孤立させられるのは救い

慰められるのは 涙するものだけ

なぜなら 涙するとは愛すること

愛するとは滅びること　生きながら死すること

ねむるがよい　ねむれよ　わが歌

ねむりこそは死の同胞<sup>(4)</sup>

沈黙が何故に「幸せ」なのか。街頭にはホルスト・ヴェッセルの歌が響き、人々は民族の指導者に忠誠を誓い、詩人たちは頌詩を捧げる、その「いま」黙っていることが、なぜ「幸せ」なのか。詩人にとって沈黙は死に等しく、しかも作者ル・フォールは沈黙しているわけではない。たしかにル・フォールは時の勢力によって推奨されていたのではなく、かえって「好ましくならず」unerwünscht とされていた。この詩を含む「一九三三年から一九四五年に生まれた叙情詩による日記」も、いわゆる「抽斗のなかの文学」であって、それらが書かれた当時に発表されたのではない。しかしそれらの詩は彼女が詩人として決して「沈黙」していたのではないことを証する。さらにこの時期には彼女の代表作に数えられるべきものを含む少なからぬ作品も発表され、書き継がれていた。<sup>(5)</sup> そうしたことを見れば、ここで言われている「沈黙」はル・フォール自身のことを述べたのではないのではなからうかと思われて来る。

「いま黙っている」のはル・フォールではなく、沈黙させられたものたちである。それはテロと密告に脅かされる大衆であるかもしれない。しかしなによりもまず第三帝国時代に権力によって沈黙を強いられた詩人・作家、あるいはみずから口を閉ざした詩人たちである。そうしたものたちに向かってル・フォールは

語りかけている。もちろん先に記したようにそのル・フォールの慰めの言葉は公表されず、それらの詩人たちに届いたはずもない。この言葉をみずからは「好ましからず」とされながらも、作品発表を容認されていたものの、そうでないものへの単なる浅薄な同情と見ることも、省みてみずからの恵まれた環境に満足する体の卑劣な自慰行為とも受け取れよう。しかし他方には、いまなお語りうるが故の危険もあった。語りえたが故に、あるいはあえて語ったが故に叛逆罪で訴えられ、強制収容所に拘引され、処刑された詩人たち。それとは対照的に語らんがために、また語りえたが故に、「恥ずべき名声」を得んがために志を曲げ、時流に迎合し、体制と大勢とに適應する誘惑に陥る危険もあった。

ユダヤ系であるが故に沈黙を強いられ、強制労働に就かされ、しかもなお密かに執筆を続けていたエリーザベト・ランゲッサーが「折りよく所謂全国著述院 Reichschrifttumskammer から追放されて、このやぐざもの」と結託する誘惑に陥らなかつたのは(略)自慢するようなことではなく、感謝すべきことなのだ」と述べたのは、ル・フォールの言葉を受けてのことではない、ランゲッサーの右の言明には、国内に残っていた文学者が戦後になって先を争うようにして、ヒトラー時代の被害者であり、みずからの当時の態度、振舞いは「国内亡命」と見なさるべきものと主張した、その風潮に向かつての皮肉の込められた、しかしまたみずからは作品発表の機会を与えられなかつたものの痛切な響きがある。

エルンスト・バルラハは公式には出版禁止も政策禁止も受けなかつたが、彼の作品が公衆の目に触れるのを妨害され、禁止され、第二の故郷ギュストロウに軟禁されたも同然の生活を強いられ、そこでの状態を彼は「一種の亡命者の生活」と呼び、さらに「ほんとうの亡命者のそれよりも劣悪である」と述べている。あ

るいはまた、これもしばしば言及される例であるが、ヨッヘン・クレッペーは「私と時代の間には厚い膜があり、邪悪な疎外がはじまるだろう(略)亡命者のような気分は決していいものではない。いまや完全に亡命状態にある」<sup>(8)</sup>と書き残した。彼はそうした亡命状態が「現今の政治情勢に照らしてみれば、成功するよりもはるかに名誉あることだ」としながらも、執筆しつつあった大作『父。ある国王の物語』の出版の可能性を探り、かつまた収入の道を求めて苦闘しつつ「作家連盟が加入させてくれさえすれば」<sup>(9)</sup>と苦衷を吐露している。

バルラハやクレッペーが亡命者同然の状態に置かれて、事実上芸術家、詩人としての活動を妨害され、制限されていたことは、「国家的、文化的使命に忠実に参加する義務」<sup>(10)</sup>を肯んじなければならなかったアカデミー会員とは違って、「恥ずべき名声から離れている」幸せであり、「成功するよりはるかに名誉」であるかもしれない。しかしバルラハ、クレッペー、ランゲッサーたちの気分は「晴れやか」であることから程遠く、「忘れられ、孤立させられる」ことが恵みや救いではないことを示している。<sup>(11)</sup>

ル・フォールはたぶん美しくうたいすぎた、たとえ沈黙させられたものたちの苦しみを思っただけであれ、それがここに反映されているかどうか、それを思いやるル・フォール自身の苦衷が埋め込まれていると言えようか。だが両者の言葉に両者の思いの奇しき符合を見いだし、「ねむるがよい、わが歌」と呼び掛けたそのみずからの歌に、ル・フォールが沈黙させられたものたちの声にならない歌を重ね合わせていたと想像するのは許されるだろう。<sup>(12)</sup>ル・フォールはル・フォールにふさわしい言葉でうたえたいのである。

そのル・フォールらしさは「愛することは滅びること 生きながら死すること」の一句にこめられている。

「世間に認められないものこそ文学は抱きとり、文学が抗い難い魅力を感じるのは追放されたものに身を捧げ、断罪されたもの——罪あって処罰されたものでも、そのもつれた道を奈落へまでも付き添い、滅びゆくもの、死にゆくものを胸に抱きとめることである<sup>(13)</sup>」と彼女はエッセイ「キリスト教文学の本質」に記している。もちろん第三帝国の権力によって処罰され、処刑され、あるいは沈黙させられた詩人たちは、ここに言われる「断罪され、処罰されたもの」ではないが、「亡命状態」を強いられたその生活は、まさにそれに等しく、「追放されたもの」にはかならない。ル・フォールはそうした追放されたものたちへ思いを馳せ、そのものたちのたどる道をたどり、いわば「亡命状態」へまでも付き添って行こうとしている、それがよし、滅びにつながるものであれ、その滅びを分かち合おうとしている<sup>(14)</sup>。ル・フォールはそうしたみずからの文学観をここにも反映させているのであって、諦めと断念を説いているのではない。ましてやそう受け取られかねない死の讚美ではない。

ここで言われる「死」の意味内容は、この詩の前に置かれた次の詩にすでに示唆されている。

まだ覚えている そのはじめりを  
夜毎の夢がおしえてくれた  
歌も死ぬことがあるのを、わたしの歌が

小さな死んだ子供たちのように ひつぎの中によこたわっているのを見て  
声を上げて泣いた 荒れ模様の夜は

暗く うっとうしかった 庭の噴水は途絶えた

赤く 見知らぬ星が天を驚かした

すると 羽ばたきが聞こえた

渡り行く鳥群のように だよめき寄せて来た 太古の大いなる調べが

ゆっくりと厳かに 数百年の彼方から

わたしの上を越えて 永遠の中へと――

するとまた 峰々から響いた

最後の群の白鳥の歌が

「おお 愛の国よ こきげんよう」

そののち調べはもう聞こえない 胸の奥深く

扉が閉じた 終わってしまったのだ<sup>(15)</sup>

ここに歌われているような「死」を受けて先の詩の「死」がある。ル・フォールは同じ詩編の中で戦禍に倒れたものを歌っていないわけではない。だがここにあらわれる「死」は歌の死であって、詩人たちの沈黙と解してよかろうと思われる。もちろん詩人が詩人であるかぎり、全き沈黙はありえない。沈黙を強いられたものたちとして、それぞれに危険を冒しつつ、みずからの白鳥の歌となりうる歌をひそかに綴っていたのであり、「沈黙」とはその声が聞こえないにすぎない。しかしそのことはこの国に、第三帝国にもはや真に歌とよばれるべき歌が存在しない、換言すればあるべきドイツの文学が存在しないことを意味する。<sup>(16)</sup>

六行目までに呼び覚まされるイメジに、一九三三年五月十日夜にドイツの各大学都市で学生たちによって行われた「焚書」、「非ドイツ的精神に対する闘争」の情景を結び付けるのは、あながち深読みとは言えない。「そのはじまり」とは「国民の召使いたるべきドイツ文学」のはじまりであり、「非ドイツ的精神」の終焉である。<sup>(17)</sup>

その終焉はすでに、同年二月十五日のプロイセン芸術院の総会において、当時の文芸部門会長のハインリヒ・マンが形式的にはその会長職を辞し、芸術院からも脱退することによって始まっていた。この芸術院総会はプロイセン文化大臣代理のルストの強い要請によって開かれたものであり、マンの辞任の背後には、芸術院に対する、直接的にはその院長フォン・シリングスに対する圧力と、文芸部門及び芸術院の解散をもつてする脅迫が働いていた。<sup>(18)</sup>その後会員に対してあたかも踏絵を思わせるアンケートが配布され、それに対してリカルダ・フーフは回答を拒否し、同時に脱退を表明した。<sup>(20)</sup>焚書が行われる直前の五月五日にはフランツ・ヴェルフェル他九名が除名され、それまでの文芸部門はほとんど完全に解体させられた。

これは芸術院会員という著名人に限ったことであるが、「人間や個人ではなく、国民があらゆる事柄の尺度である」<sup>(21)</sup>とするナチの文化政策によって禁止されたり、「好ましからず」とされたりした文学者、芸術家等の数は一九三五年だけでも五二四名にのぼった。<sup>(22)</sup>焚書を亡命先で知り、しかも自己の作品が焼かれるどころか、ナチの推奨リストに載っているのを知ったオスカー・マリア・グラーフは、「われを焼け」<sup>(23)</sup>と抗議の声をあげ、みずから「恥ずべき名声」を投げ捨て、真のドイツ文学、「もうひとつのドイツ」の側について。ナチはみずからの手によって真のドイツ文学、ドイツの歌を焼き捨てたのである。



そうだとすれば、ル・フォールの言う「沈黙の幸せ」は口を閉じさせられたものへの最高の讃辞となりうる。いまなお語りうる、作品の公表を容認されている自己の文学を、もしかしたら否定することになる矛盾と危険を冒してのオマーージュでありうる。だがもちろん彼女はみずからその「恥ずべき名声」に包まれた詩人に数えてはいない。そのひそかな誇りと沈黙の詩人たちへの親近感とが、彼女に「ねむれ、わが歌」とうたわせるのである。<sup>(24)</sup>

またここで暗示されているのは、そうした詩人たちの沈黙による歌の死のみではない。「おお 愛の国よ ぎげんよう<sup>(25)</sup>」と告げて去って行ったのは、あるいは立ち去らざるをえなかったのは、ル・フォールがまた「多くのものが去って行った だがわたしは残る／わが祖国の墓所のかたわらに<sup>(26)</sup>」とうたったその「多くのものたち」、すなわちヒトラーのドイツから追放され、あるいはみずから危険を避けて亡命したものである。彼らもまた沈黙させられたものたちだった。その追放されたものたちこそ、輝かしい伝統を受け継ぐ真のドイツ文学の担い手であると自負していたのである。

第三帝国内にはもはや真のドイツ文学は存在しない乃至存在するのはきわめて難しいという認識において、奇妙にも国内に残ったル・フォールと、亡命したものたちの間に一致があった。もちろん両者の間には微妙な差異がある。ル・フォールが第一に沈黙させられた詩人に教えるのは国内に残ったものたちであり、そのものたちは歌の滅びたこの国で、孤独のうちにその胸奥深くひそかに歌を育んでいた。しかし、亡命者たちの思いは国内事情を十分に知ることができなかったこともあって、より複雑であった。

(一)

「多くのものが去って行った。だがわたしは残る／わが祖国の墓所のかたわらに」という一句は、国内に残ったものたちの亡命者に対する微妙な気持ちをうかがわせ、かつ一九三三年から戦後までに生じた両者の間の相互理解と、時には敵意また憎悪と言ってもいいかもしれない齟齬や誤解についても少なからぬことを暗示している。

ル・フォールが、亡命したものたちをどのように考えていたかは詳らかにしえない。しかしたとえ彼女は、その信仰の故に故郷を追われ、一六世紀以来ヨーロッパ各地を転々とした先祖たちのことを思つて、「ここから立ち去ることを／彼らはその脚に命じ／世界に語ることができた／もう誰もわたしたちの姿を見たくも思わないのだと」<sup>(27)</sup>とうたった。そこに込められたル・フォールの亡命者に対する気持ちだが、ナチ時代の亡命者たちにたいするものと同質であるとは断言できないが、「しかし故国は変わらず／静かな真実の故国のままであり／わたしたちを追放せず／わたしたちを誠実に見分けてくれた」という一節は、時代背景を異にしているとはいえ、ヒトラー・ドイツではない「もうひとつのドイツ」の代表者をもって任じた亡命者の故国に対する期待と憧れに通じるものがあると言えよう。

しかしまた、「おおくのものが去って行った。だがわたしは残る／わが祖国の墓所のかたわらに」と同じような言葉は、しばしば国内残留者が亡命者を非難し、批判し、みずからの立場を弁護するのにも使われた。しばしば言及されるように、「国内亡命」という語及び概念が世間の注目を浴びるようになったのは、一九

四五年末に行われたヴァルター・フォン・モロー及びフランク・ティースとトーマス・マンとの間の論争によってであった。<sup>(28)</sup>そこでティースはドイツの作家であればドイツに帰属し、その持ち場を堅持しようとするべきであり、しかしそれは海のむこうからドイツ国民にメッセージを送ることよりはるかに困難であつて、トーマス・マンは居心地の良いアメリカにいて、ドイツの崩壊を目の当たりにすることから免れたのを感じすべきである、第一及び第二の書簡で感情的に述べた。ティースの第一の書簡及びそれに先立つ、この論争の契機となつたモローの書簡に対する返書において、トーマス・マンは、これもまた少なからず感情的に、この十二年間にドイツ国内で出版された文学は、血と汚辱の臭いがすると、ナチ文学と非ナチ文学あるいは反ナチ文学の区別なしにすべてを切つて捨てた。<sup>(30)</sup>この論争はただに「国内亡命」を浮かびあがらせたのみでなく、国内残留者と亡命者の対立を、その両者に架橋しようとする試みが、少なくとも戦争直後には、様々になされたにもかかわらず、<sup>(29)</sup>再燃させたのである。

再燃させたというのは、すでに十二年前、ドイツの文学が国内と国外とに分裂させられた時に、詩人ゴットフリート・ベンとトーマス・マンの息子で作家であつたクラウス・マンとの間で、ナチ観とナチに支配される国内に残り文学に携はることをめぐつて有名な論争が行われていたからである。

クラウスは、ベンがなぜいまなお芸術院から脱退しないのかを問い、なぜ世界が顔をそむける程の道徳的不純と、ヨーロッパの歴史に類を見ないほどに低級な文化しか持たないものたちに自分の名前を自由にさせているのかを問い、尊敬する詩人を「向こう側」に失いたくない真情を吐露し、さらには「精神」を失つた国でベンが受けるのは忘恩とあざけりだろうと予言する。<sup>(32)</sup>それに対してベンは、長文の返事を、まず放送を

通じて行ったが、ドイツ国内の事柄について語り合えるのは、ドイツ国内にあってみずからそれを体験しているものたちとであつて、外国へ旅立つた逃亡者 Flüchtling とではない、と亡命者に対する軽侮を込めた反発をしめた。<sup>(33)</sup>このペンにみられるような反感が、十二年後のティースの言辞の中に再び現れたのである。しかし、その十二年間における両者の相互に対する感情や見解は、そうした反発や反感ばかりではなかつた。

国内に残つたものたちが、亡命したものたちをどのように考えていたかを知るべき手掛かりとなる証言は意外に少ない。それというのも、ナチの支配体制が強化されるにつれて、殊に一九三九年九月の開戦後には、亡命者の作品が国内に持ち込まれることはもちろん、その消息さえ、なんらかの地下組織に閥わりのあるものを除けば、ほとんど知ることができなかつたからである。<sup>(34)</sup>ましてや、組織に属することのほとんどなかつた作家たちが、そうした機会を持ちうる可能性はなかつたといえよう。<sup>(35)</sup>相手の置かれた状況についてほとんど知りえなかつたということについては、亡命者も同じ立場にあつた。しかし、亡命者の国内残留者に対する見方は、この時期を通じておおよそ好意的であつた。

亡命の初期には、ドイツの詩人たちは、「ドイツから脱出しないかぎり、ドイツ文学という奴隷軍団に召集されている」と激しい非難を口にしたヘルマン・ケステンにしても、時間の推移とともに「沈黙を強いられる」詩人たちの存在を認めるようになる。<sup>(36)</sup>その間にはフォイヒトヴァンガー、ベッヒャー、ハインリヒとトーマス及びクラウスのマン兄弟父子などによって、国内残留者を亡命者と同じように反ファシズム、反ヒトラーの陣営に教えようとする見解が発表され、国内に向かつて呼び掛けられてもいた。<sup>(37)</sup>

そのような亡命者の見解と国内残留者との連帯への呼び掛けを示す例として、当時モスクワで発行されていた雑誌「言葉」Das Wort の一九三七年四月号が、一九三五年四月ミュンヘン大学で行われたエルンスト・ヴィーヒェルトの講演を抜粋して掲載したことがあげられよう。<sup>(38)</sup>

それに付された「短いあとがき」には、当時の亡命者が国内に留まっているものたち、とりわけ詩人たちの発言をいかに待望していたかがうかがわれる。そしてかれらはこのヴィーヒェルトの講演に、これまでかたくに沈黙を守っていたものたちの中から発せられた勇氣ある言葉を、同時に声なき声を代理するものの声を聞いたのである。

しかし彼らは、それだけで満足していたのではない。亡命者たちが国内残留者に真に求めていたのは、その良心の声や良識のしるしだけではなかった。「われわれはこの講演のあるのを知りたいまとなつては、いっそう差し迫った気持ちで、ヴィーヒェルトのように考える人々と話し合えるようになることを望んでいる。あれこれのことを尋ねたいし、もしかしたらわれわれのほうでもいろいろと応えなければならぬだろう」と「あとがき」にあるように、亡命者が求めていたのはドイツ国内において、たとえヒトラー・ナチ体制に積極的に抵抗することはなくとも、決してそれに肯じない、与することのない人々、ひそかにではあれ批判と反対の意志を抱いたものたちとの提携であり、連帯であった。だが、そうした連帯が単なる連帯感を越えた具体的な交流として成り立つための条件が、はたして存在していただろうか。すでにしてこの「あとがき」はその容易ならざることを暗示している。「あとがき」はヴィーヒェルトによる臆病な教養ある市民と学生、青年たちの道徳的、倫理的退廃への批判をそれなりに肯定的に受け入れながらも、こう付け加えてい

る。「しかしわれわれは、すでに見解を同じくしているだろうか、(疫病の蔓延している)湿地帯では、それ自体が干拓されないかぎり、腕利きの防疫専門家でさえ、人々を健康に保つことはできない、という点において。」<sup>(39)</sup> こうした呼び掛けは、たとえそれが第三帝国内に届いたとしても、国内残留者に重い負担を強いることになり、提携の実現はかえって困難になっただろう。

同じように、内と外との亡命の連帯の可能性を探っていたものにトーマス・マンがいるが、そのような亡命者側からの働き掛けにもかかわらず、<sup>(40)</sup> ヴィーヘルトはもとより、他の国内の文学者たちは、国外に向かって声を上げようとはしなかった。そればかりか、ハンス・カロッサはハインリヒ・マンなどの国外における活動について不快感を示し、<sup>(41)</sup> 一九四一年にナチによって設立された「ヨーロッパ著作家協会」の会長に就任した。<sup>(42)</sup> そうしたことが、それまで国内にある文学者に対して、亡命者たちが抱いていた期待を萎えさせ、彼らの間に不信と批判の念を増大させたのである。しかし、それでもなお、ベリイルントが指摘しているように、亡命文学者たちは国内の同僚たちと、かれらがナチでないかぎり、協調しようとしていたのである。<sup>(43)</sup>

(三)

世間はかれらの名前すらよく知らない

かれらはただよう 暗く 明るく

帽子を頭からもぎとるようにして

人々はかれらにあいさつしようとする——だがかれらは見向きもしない

かれらはゆつくりとまた軽やかに歩む 嵐が吹き荒れ

かれはもう死んだのだと 不安な気持ちにさせられるものがある

だが生きている 盟約を交わした名の知られぬものたちが

隠れた一群の援助者たちが

拷問が脅かし 苦痛は激しい——

たたかいは迷うことなく続けられる

かれらこそ 来るべき人間の王国の

聖者であり 騎士なのだ<sup>(44)</sup>

「非合法活動家たち」と題された二節から成るこの詩は、国内に残って反ファシズム抵抗活動に従事したものを亡命者がうたったものである。この「非合法活動家」たちは「積極的」であれ、「消極的」であれ、なんらかの抵抗活動をしたものたち、主として労働者や組織に属していたものたちをさしきいて、作家はその背後に隠れてしまっている。<sup>(45)</sup> 亡命者たちは亡命初期の「この馬鹿騒ぎはおそらく長くは続くまい」という見方から、この詩の書かれた一九三七年頃までには、「闘いは長い視野のもとで考えなければならぬ<sup>(46)</sup>」<sup>(47)</sup> と思うようになっており、呼び掛ける相手を作家たちに限定せず、むしろドイツ国民一般、ことに戦闘的な労働者に変えていた。

ペリイルントによれば、亡命者たちは「国内亡命」という概念を二つの異なった意味において用いていた。まず活動的、非合法的抵抗、換言すれば積極的抵抗であり、次に間接的、隠れたプロテスト、あるいは沈黙への隠遁としての受身的抵抗すなわち消極的抵抗である。また同時に、後者は前者への移行段階として理解され、期待されていた<sup>(48)</sup>。しかし作家の抵抗を考へる場合には、この区別はほとんど役に立たない。執筆禁止処分を受けたものは、その処分に異を唱えずにいたにしても、ナチに同調しないだけでも抵抗たりえたであろうし、仮に処分に逆らつて創作活動——もちろんなんらかの形でを発表を前提とした——を続けようとするれば、必然的に非合法となり、隠れたものにならざるを得ない。また作家としての活動を容認されていたものにしても、その活動に抵抗の姿勢を反映させようとすれば、非合法ではなくとも、間接的、暗示的なものにならざるをえない。作家、詩人に限定して「国内亡命」を考察するとすれば、彼らにおける「抵抗とは何か」が中心課題とならなければならない。

抵抗のレヴェルには、おおまかに言つて、個人対個人、個人対組織、また組織対組織などが考えられよう。今ここで問題にしているのは、個人対個人のレヴェルでの抵抗ではない。もちろんヒトラー個人に対するなんらかの理由による個人による抵抗、あるいは批判、攻撃は考えられないわけではない。だがヒトラー個人に対する攻撃に見える場合にしても、ヒトラーという個人は、彼の背後にあるナチ党という組織を支えている(しかしまた逆に彼自身がこの組織によつて支えられてもいるのだが)思想なり、イデオロギーの体現者となさされているにすぎない。六月二十日事件<sup>(49)</sup>に代表されるようなヒトラーに対する暗殺の試みなどがそれである。しかしその場合にもヒトラー個人に対する、たとえば、シュタウフェンベルク個人の攻撃とはいえない。



彼が属する、たとえ彼が中心的役割を担っていたとはいえ、国防軍内部の反ナチグループの決断を彼が実行したにすぎない。つまりシュタウフェンベルク対ヒトラーという個人対個人レヴェルでの抵抗ではなく、組織対組織レヴェルでの、あるいは個人対組織レヴェルでの抵抗である。またヤン・ペータゼンの『われらの街』に描かれたような抵抗活動もそのようなものと言えよう。しかしたとえ組織の決定であれ、それを実行に移すには、それを実行すべき個人によるその承認と決断がなければならない。あるいは組織がなんらかの決定を下すためには、それ以前にその組織を構成する個人の、文字通り個人的な、決断が先行しなければならぬ。その決断は個人の思想、信条に基づいてなされるはずのものである。

いかなる政府、国家であれ、それが国民≠個人や、その集合体である政党などの様々な要求に、完全にとはいえずとも、対応し、その権力行使が通常の行政とそれに伴う必要最小限の域を出ず、社会の安寧秩序の保持と個人の幸福追求を保証し、基本的人権を侵すことがなければ、国民≠個人の側から政府に対する批判は別として、反政府的、反体制的行動が起こされることはないだろう。しかし、国家権力がそうした権力行使の則を越えないという保証はなくて、むしろ国家はその権力行使の範囲を常に拡大しようとする。ナチズムなどの全体主義による国家であれば、その権力拡大欲は無際限であり、むしろ全体主義はそれをこそその最大の特徴としているといっても過言ではなからう。全体主義は、たとえ自らと同質の思想、信条であれ、それがおのれの認可と保証の下に表明されるものでなければ、情容赦なく弾圧し、抹殺しようとする<sup>(50)</sup>。ましてやそれらの思想、信条がみずからのそれと異質であり、対立するものであれば、なおさらである。その時、つまり国家権力がその則を越えて、個人の基本的人権、思想、信条を侵そうとする時、あるいは日常的次元

で言えば、生活に必要な様々な物資が十分に供給されないなどの不満が限度に達した時、個人による反政府的行動への、国家権力行使に対する抵抗への決断は下される。それ故抵抗の起源は道徳的、倫理的判断にあると言えらる。

その判断に基づいた抵抗が顕在化し、積極的、攻撃的手段を用いる時、白バラ・グループの活動となり、さらには六月二十日事件となる。しかし他方その抵抗が潜在的なままにとどまることもあり、沈黙がその一形態でありうるだろう。

すでに本論のはじめにル・フォールの詩によって国内において沈黙させられたものたちの存在を指摘し、いままた沈黙それ自体が抵抗の一形式でありうることを示唆したが、沈黙が抵抗でありうる条件は何か、単にナチに同調しないということだけで、必要かつ十分でありうるのかをあらためて問わなければならない。

前述の戦後におけるトーマス・マンとの論争の中で、フランク・ティースは、みずからの第三帝国時代の態度を「国内亡命」と呼び、その意味について「われわれドイツ国内の亡命者が拠り所とした世界は、内面的領域であって、ヒトラーがいくら苦心したところでそれを侵すことはできなかつた」と主張した<sup>(5)</sup>。この主張を契機にあらわれた「国内亡命者」による自己弁護的言辭によって、この概念乃至現象が、それまでとは違って、うさん臭いものに貶められ、以後の抵抗文学、亡命文学の研究に影を落とすことになったのだが、そのことよりも、ここで指摘しておきたいのは、ティースが何の留保もつけずに *Innere Emigration* を *Innere Raum* を拠り所とした抵抗、すなわち *Innere Widerstand* 内面的抵抗の意に用いていることである。

すでに見たように亡命者たちは、国内亡命 Innere Emigration を国内亡命者 Innerer Emigrant による国内における抵抗 Widerstand in Deutschland<sup>(52)</sup>と考えていた。他方 Innere Emigration は内面への亡命 Emigration nach Innen でもありえて、作家の場合にはその内面への亡命が、はたしてそのままテイスの主張するような内面的抵抗になりうるかが問題なのである。<sup>(53)</sup>

「国内亡命」の定義に際しては、ほとんどすべての研究者によって、それが「抵抗」を意味するものとして扱われている。したがってある作家が、「国内亡命」に数えられるか否かは、もっぱらその作家の態度や作品が、「抵抗」を表すものであるかどうかによって判定される。そうした定義のうち、おそらくもっとも穏当であると思われるものを試みに挙げておく。

国内亡命の文学に数えられるのは、国外亡命の作家と同じく、その作者がナチ・イデオロギーの影響を受けず、人道主義的な作品を書き、ファシストの政策に同調しなかったものである。ドイツ国内の反ファシズム文学として理解されるのは、このような文学の一部であり、反ファシズム的抵抗の手段として、あるいは反ファシズム的態度の表現として一九三三年から四五年の間にドイツ国内で書かれたものである。ドイツ国内の反ファシズム文学は——抵抗文学とも呼ばれるが——国内亡命の文学を構成する要素であり、しかも——社会的機能から見ても——もっとも能動的で有効な要素である。反ファシズム文学でありうるのは、非合法に配布された文書、また著者が「奴隸の言葉」で書いたが故に公刊されえた文学作品、また公刊の見通しや配布の意図なくして、獄中であるいはその後、反ファシズム的態度の表現として、あるいはさらに抵抗や迫害を反映するものとして生み出された文学などである。反ファシズム文学は——著者の

世界観的立場によってであれ、また様々な生成条件によってであれ——必ずしも常にファシズムに対する的確で深い批判にはならずとも、ファシズムの本質、原理ないし現象形態と対立するものである<sup>(54)</sup>。

きわめて広義に、あるいは周到に解された国内亡命文学観を示したものと言えよう。これによれば、反ファシズム文学は、第一に「抵抗の手段」として「非合法」に配布されたものであり、第二に「奴隸の言葉」すなわちカムフラージュによって公刊されたもの、第三に「公刊の見通しや意図なくして」書かれたものをも含んでいる。しかし注意しなければならないのは、国内亡命文学すなわち反ファシズム文学＝抵抗文学ではないとされて、「ファシストの政策に同調しなかったもの」換言すれば「非ファシズム的」文学と、「反ファシズム的」文学を区別していることである<sup>(55)</sup>。もちろん前引部の直後で、ブレックレも認めているように、「非ファシズム的」文学と「反ファシズム的」文学の区別は容易ではない。

この点については、亡命者たちが戦後になっても国内亡命文学に対してかなり寛容であり、好意的であったのとは対照的に、戦後の研究者たちの中には非常に厳しい判断を下すものが少なくない。エルンスト・レヴィはゴットフリート・ベン、エルンスト・ユンガー、ハンス・カロツサに言及しながら、「非ナチであることと反ナチであることは同じではなかった。非ナチであるものは妥協することも、それどころか一時的には煽動家たちの犠牲になることもあった。煽動家に侮辱されることも、カタツムリのように自分の殻に閉じこもることも、軍隊や『内面的亡命』に引きこもることもできた。(略)反ナチであったものは、亡命を選ばないかぎり、強制収容所行きが待っていた<sup>(56)</sup>」と言う。しかし「自分の殻に閉じこもる」ことで、自分以外に読者を持ちえない文を綴ること、みずからの志を曲げることのなかったものもあるだろう。たしかに強

制收容所に入れられることと、たとえいかに苦痛ではあっても単に「亡命状態」を余儀なくされたこととは等置できない。しかしアルブレヒト・ハウスホーファーが『モアビター・ソネット』<sup>(57)</sup>を遺すことで、獄中の死の恐怖を克服し、みずからの生の確認をし、クレッパは聖書を繙き、日記を綴ることで辛うじて志操を邪悪な力から守ったとすれば、前者を「反ナチ的」であり、後者を「非ナチ的」であると区別することにさしたる意味があるとは思えない。<sup>(58)</sup>

「非ナチ（非ファシズム）的」と「反ナチ（反ファシズム）的」を、別の観点から規定すれば、「消極的」と「積極的」ということになるが、これについても同じことが言えよう。送り手である作家の側からすれば、積極的抵抗とは歴史的素材などによりナチ批判をカムフラージュした作品を書くことであり、時には直接的に現実の相貌を描き出すことであるだろう。<sup>(59)</sup> それにたいして消極的抵抗とは比喩であれ、カムフラージュであれ、特にナチ批判を含まずとも、ナチ的な声高な「血と土地」の讚美とは無縁なものを指し、その中には田園詩や自然叙情詩といったものが含まれる。<sup>(60)</sup> しかしそれらのいずれを選ぶかは、作家の抵抗の意志の強弱によるといふより、むしろその作家本来の傾向や資質によるのである。<sup>(61)</sup> 自然叙情詩を専らにするものが、一見してそれとわかる抵抗詩を書くようにならなかつたといつてそれを批判しても無意味である。

受け手である読者の側からすれば、積極的抵抗とはせいぜい非法法文書や作品を読んだり、複写してさらに配布することであろうが、それとても直接行動による抵抗に比べれば消極的ではない。<sup>(62)</sup> したがって「非ナチ的・反ナチ的」であれ、「消極的・積極的」であれ文学的抵抗をそうした分類によって評価することが、その理解をより正確なものとし、深めてくれるとは思えない。<sup>(63)</sup> 弁明に惑わされない注意は当然必要であるが、

そしてそのためには問題の事柄から距離を置くことも必要であるが、しかしより必要なのは事柄に接近しつつ冷静に眺めること、不可能なことを承知で言えば、できるだけその時代の雰囲気の中に身を置いて考えることではなからうか。

唐突に奇妙な例を挙げるが、日本のある随筆家がその戦時中の日記で次のようなことを書いている。「相手が軍だから、さくらを切るか切らないかという主題はどうかすると軍を諷したようにとられると大変だ。桜の樹が成長して他の庭木が日陰になり、主人公が悩まされる件なども、あまり軍費をかけすぎて人民が苦しむ、という風にとられると困る<sup>(64)</sup>」。この著者徳川夢声は、「ただユーモア小説」を書こうとしているだけで、「桜」を「軍」に、「庭木」を「人民」になぞらえようなどとはしていない。しかし特に反戦的でも、また軍人嫌いではあっても、反軍的であったとは思われない役者兼業の随筆家夢声でさえ、そううけとられかねないことを心配しなければならない。

この例が当面の筆者の課題と関わりを持つのは、この文章がいまのわれわれには何の変哲もないこととおもわれるような一語や描写、あるいは作品を、それが生み出された時代の雰囲気の中に置いてみれば、その時代なりの意味を持ちうることを示唆しているからである<sup>(65)</sup>。いまならナチ的と思えるようなことすらも、その時代の環境の中でなら「奴隷の言葉」を用いた、あるいは相手の武器を逆にとった非ナチ的、反ナチ的なメッセージを含んでいるのかも知れない。あるいはまた夢声<sup>(66)</sup>が恐れているように何の他意もないものが、何らかの意図を含んだものと受け取られることもあるだろうし、逆に著者の意図したものが読者には伝わらないこともありうるだろう。

ベルゲン・グリューンの作品が、この点に関しては興味ある例を提供している。彼の『大暴君と審判』をナチ党機関紙「民族の監視兵」は「ルネッサンス時代の総統小説」と呼んで推奨したが、読者が歴史のカムフラージュによる現実批判と受けとめていることがわかった時点で、ようやく禁止された。著者の意図を一般読者は正しく受けとめたが、検閲当局は、ナチ行政機関内の様々な事情もあつて、はじめはそれを見抜かず、素早く対応できなかったのである。<sup>(67)</sup> このベルゲン・グリューンの例に見られるように、受け手である読者はカムフラージュによって秘匿された作者の意図を十分に掴みとるだけの力を持っていたと言われている。<sup>(68)</sup>

しかし仮に作者の意図が伝わったとしても、それが読者に及ぼす影響、効果は何であったのか、先のブルックレの定義の中にも、「社会的な有効性」に言及されていたが、そもそもそうした働きが期待できたのか。これにも肯定、否定相対立する見解がある。否定的なものとしては、たとえば「積極的で国民を教育するような効果は『国内亡命作家』の作品からは生まれなかった」という見方が挙げられる。<sup>(69)</sup> しかし、他方国内亡命作家を代表する一人に数えられるラインホルト・シュナイダーは、第三帝国時代に「アンチクリスト」<sup>(70)</sup> などの多くのナチ批判的なソネットを書いたが、そのうちのひとつ、これもよく知られた「祈るもののみ」と題する一編について、一九四八年に次のような証言がある。「この詩は説教壇で語られ、塹壕やスターリングラードの孤立した陣地でも読まれた(略)この詩が当時それほど急速になかば秘密裡に広まったのは、もっぱらそこに新しい強烈な体験が、つまり祈りがあの時代の悪魔的な力に対抗しようという体験が言い表されていたからである。<sup>(71)</sup>」このことは作者の伝えようとするものが読者に十分に伝わっていたことを示している。それはただ慰めを与えたにすぎず、国民を反ナチ的行動に立ち上らせることはなかったかもしれない。

シュナイダーのソネットやベルゲングリューンの詩編『怒りの日』<sup>(73)</sup>などがそうした社会的な効果を持つことはなかったにしても、それだからといって彼らを含む国内亡命作家が第三帝国に許容されていたのは、「新しい国家に対し、またその文化政策に対してなんの危険もない、というのもこれらの作家たちの作品は形式的にも、内容的にもナチズムの思想にとって深刻なものではないからである」<sup>(74)</sup>とはならないだろう。<sup>(75)</sup>

文学的抵抗のもたらしうる社会的、政治的効果を測定しうる手だてが、そもそもあるとは思われない。ある作家なり作品が、読者にいかなる影響を及ぼしたかを尺度として、その作家なり作品なりが反ファシズム的であるか否か、ナチに同調的であるか、ナチ補完的であるかなどを判断しようとするのは、抵抗文学、ことに国内亡命文学を抵抗文学として考察する際には無意味である。

そうした判断はしばしばその判断を下す側のイデオロギッシュな立場に左右され勝ちであり、レヴィによる「非ナチ・反ナチ」などの区別も、彼自身が指摘しているように、第三帝国時代の問題であるよりも、その後の問題、主として戦後の作家の責罪論、戦争責任論に関わることである。トーマス・マンに代表されるような戦後における国内亡命者にたいする反発と非難は、まさにその点に向けられていたのである。<sup>(76)</sup>

戦後アメリカ兵としてドイツに入ったクラウス・マンは記している、「ナチスは、ドイツには全くいなかっただけのこと、今や明らかになりました(略)『国内亡命』ばかりです……」<sup>(77)</sup>しかし、第三帝国時代に実際に何らかの抵抗を行ったものたち、あるいは沈黙を強いられたものたちは、ベルゲングリューンにしろ、シュナイダー、ランゲッサー、ヴィーヒェルトにしろ、みずからの身の処し方を戦中戦後を通じて「国内亡命」あるいは「内面への亡命」とは呼んでいない。それどころか「内面的抵抗」さえ文字通りには主張して



いないことは注目されている。バルラハやクレッパがそうした言葉を用いたのは、すでに見たように、第三帝国時代のごとであり、しかもそれは「国内にありながら亡命者と同じような状況」を強いられていることを表したにすぎなかった。ハインリヒ・マンが指摘したように「バルラハにその気がありさえすれば」ナチの正体を「自分の体験から人々に解き明かすことも」<sup>(78)</sup>できたかもしれない。またユダヤ人である妻子を強制収容所から守るためにはあれ、ナチの高官とすら交渉を重ねたクレッパ<sup>(79)</sup>は、抵抗とも批判とも無縁だったといえるかもしれない。しかし彼らは「恥ずべき名声」を享受することなく、志を曲げることもなかった。彼らがナチ体制の崩壊を迎えることができれば、彼らも「国内亡命」を主張したかどうかは想像の域を出ない。<sup>(80)</sup>

いずれにせよ、ランゲッサーが不快の念を示したのは、彼らに対してではなく、トーマス・マンが言ったように、「この十二年間がなかったものごとく」<sup>(81)</sup>振る舞ったものたち、検閲当局に見る目があれば、自分の文学は彼らの世界観を拒否するものであることがわかったはずだ、と臆面もなく主張するものたち<sup>(82)</sup>だった。彼女は亡命者も国内亡命者も文学者、詩人であるかぎり、共通の故郷を持っていて、そこではどちらがどちらより優れているかなどという「優越論争」は無縁のことだと言う。詩人の共通の故郷とは言葉であって、ナチによってその言葉が「誤用され、辱しめられ、空虚なものにされ、貶められ、似非詩語にされた」<sup>(83)</sup>時代に、真に詩人に残された可能性は、それらの概念を放棄し、その損失によってかえって予期しなかった「本質的な深み」を獲得すること以外にないと言う。

「国内亡命」の「亡命」を、バルラハやクレッパの場合のように考えるなら、ティースやモーロはもと

より、ル・フォール、ベルゲングリユーン、シュナイダー、あるいはヴィーヘルトもそれには含まれない。クレッピーですら、結局は出版を許可されたのだから、その点にかぎっていえば、「亡命」とはならないだろう。しかし、「亡命状態」を強制された作家が向かうべき所はどこなのか。国外に亡命した作家が、たとえ周囲にドイツ語が通じないような状況にあつてもなお、いやかえってそれだからこそといえるかもしれない、詩作を続けたように、<sup>(84)</sup>「国内亡命」させられたものにとつても、言葉の世界と絶縁することはなかつたはずで、その場合彼が向かう所、身を置くべき所は、まさに内面世界、精神の深み以外になつたはずである。その意味では、前述のティースが主張した「ヒトラーさえ侵しえなかつた内面の領域」は、彼にそれを云々する資格があるか否かを別にすれば、たしかに存在したと言えよう。

抵抗がその起源を、先に触れたように、「道徳的、倫理的判断」に持ち、積極的、攻撃的抵抗の極致が武器をとつてのそれであるとすれば、消極的、防衛的抵抗の最後の砦は内面世界、精神の深奥であり、詩人、作家にとつては、ランゲッサーにならつて言えば、言葉という故郷である。

たしかに「沈黙はただちに抵抗を意味するものではない」<sup>(85)</sup>が、沈黙を強いられたものとして、詩人であるかぎり、その故郷を離れられないはずであり、汚された言葉の新たな深みを探求し続けるに違いない。<sup>(86)</sup>その営みが続けられるかぎり、詩人はその故郷をヒトラー独裁によって狭め続けられるなかで、「最後の結晶、最後の原石たる自己自身」に向けられた試練に耐えうるのである。その時沈黙を強いられたものの沈黙は、精神を抛り所とした抵抗であり、「内面への亡命・精神への亡命」は、「内面の抵抗・精神による抵抗」と呼ぶうるのである。(完 一九八六・三)

追記 右は一九八四年以来の、故松俊夫教授との共同研究「ドイツ第三帝国と反ファシズム抵抗活動」等に  
対して与えられた成城大学教員特別研究助成による研究成果の一部である。

[注]

引用、言及した詩の原文は最後に補注として一括して掲げた。

(1) *Innere Emigration* と表記されるこの語については、その定義ないし概念規定をめぐって、内的亡命、  
精神的亡命などと呼ばれる。筆者は、*Innere Emigration* の inner, *Emigration nach Innen* の  
Innen を「精神的」あるいは「精神的領域」と解してゐるが、それでは inner, Innen の示唆する  
ものについての意味「国内」が欠落する。小論ではより慣用的な「国内亡命」を主として用ゐるが、  
時に応じて両者を使うことを断りしておく。この場合は便宜上「国内亡命」として表記を用ゐるもの  
とする。

(2) Charles W. Hoffmann, *Opposition und Innere Emigration: Zwei Aspekte des „Anderen  
Deutschlands“*, In: Hohendahl u. Schwarz, *Exil und Innere Emigration II* (註 3) S. 126.

(3) Peter Mertz, *Tarnung und Widerstand*, In: *Und das wurde nicht ihr Staat*, Verlag C. H.  
Beck, München, 1985, S. 68.

なお本文中で引用、言及したものを中心として、ふたつかの文庫を挙げておく。

(a) R. Grimm u. J. Hermand (Hrsg.), *Exil und Innere Emigration. Third Wisconsin Work-  
shop*, Athenäum Vlg., Frankfurt/M., 1972. (b) P. U. Hohendahl u. E. Schwarz (Hrsg.), *Exil  
und Innere Emigration II. International Tagung in St. Louis*, Athenäum Vlg., 1973. (c) Ralf  
Schnell, *Literarische Innere Emigration 1933-1945*, J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung,  
Stuttgart, 1976. (d) Gisela Berglund, *Einige Anmerkungen zum Begriff der „Inneren Emi-*

- gration." Stockholmer Koordinationsstelle zur Erforschung der deutschsprachigen Exil-Literatur. Stockholms Universitat, Deutsches Institut, 1974. リベラ著 G. Berglund, Der Kampf um den Leser im Dritten Reich (邦註) と取らなれた。 (e) Walter A. Berendson, Innere Emigration. Stockholms Universitat (?), 1971. (f) Charles W. Hoffmann, Opposition Poetry in Nazi Germany. Berkeley and Los Angels, 1962. (g) H. R. Klienberger, The Christian Writers of the Inner Emigration. Mouton, The Hague & Paris, 1968. (h) Heinz Ludwig Arnold (Hrsg.), Deutsche Literatur im Exil 1933-1945. Bd. I: Dokumente. Bd. II: Materialien. Athenäum Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt/M., 1974. また邦語文献としては 中、山本 尤「マンガー・ジ・マン・ト・ブ・ウ・マン・ニ」——ナチ時代の「国内亡命」の問題をめぐって——ドイツ文学論集 神戸大学。同「情況の中の文学」ナチ時代の「国内亡命」という奇妙な概念。現代思想 一九七四年七月。
- (4) Gertrud von le Fort, Lyrisches Tagebuch aus den Jahren 1933 bis 1945. In: Gedichte. Insel-Verlag, Wiesbaden, 1958. なな補註一冊、参照。
- (5) 三三年から四五年の期間に限定すれば、ヘッセの「永遠の女性」Die ewige Frau, 「グデブルクの婚宴」Die Magdeburgische Hochzeit, 「犠牲の炎」Die Opferflamme, 「海の裁き」Das Gericht des Meeres などが出版された。長編「ヴェロニカの犠牲」Das Schweibuch der Veronika の第二編「天使の花冠」Kranz der Engel が脱稿していた。また彼女は三〇年代前半にはドイツ、スイスに講演旅行をおこなうことまでを、三五年には最初のル・ノートル論も発表されているが、三八年以後ナチ的文学史では無視されるようになった。Gisbert Kranz (Hrsg.), G. v. le Fort. Leben und Werk in Daten, Bildern und Zeugnissen. Insel Verlag, Frankfurt/M., 1976.
- (6) Elisabeth Langgasser, Schriftsteller unter Hitler Diktatur. In: Ost und West. Beitrage zu kulturellen und politischen Fragen der Zeit. Hrsg. v. Alfred Katorowicz. Heft 4/1947. S. 41. auch In: H. L. Arnold (Hrsg.), Deutsche Literatur im Exil 1933-1945. Bd. I (邦註) S. 280-285.

- (7) Ernst Barlach, Als ich von dem Verbot der Berufsausübung bedroht war. In: E. Barlach, Die Prosa II, Hrsg. v. F. Drob, Piper Verlag, München, 1959. この文は田村が一九三七年七月二十六・三〇日にならしたものである。シムランは一九三七年七月八日付の「可及的速やかにみちからマカネミーからの脱却を表明せられた」……」と云うマカネミーからの脱却を対して「同月十一日脱却を表明した。Hildegard Brenner, Ende einer bürgerlichen Kunst-Institution. Die politische Formierung der Preussischen Akademie der Künste ab 1933. Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart, 1972. S. 143f. シムランの文は『文藝』の題づけで Ernst Piper, Ernst Barlach und die nationalsozialistische Kunstpolitik. Eine dokumentarische Darstellung zur „entarteten Kunst.“ Piper, München, 1987. 及び Ernst Barlach, Werk und Wirkung. Berichte, Gespräche, Erinnerungen. Gesamlt. u. Hrsg. v. Elmer Jansen, Athenäum Verlag, Frankfurt/M., 1972.

- (8) Jochen Klepper, Unter dem Schatten Deiner Flügel. Aus den Tagebüchern der Jahre 1932-1942. Hrsg. v. H. Klepper. Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart, 1956. S. 69. am 10. Juni '33. これは抄訳であるが、小楯節「小楯千代訳『まひばらのかきと』——愛と死の日記』日本基督教団出版局 一九七七年がある。ほかたいくつかの作品をあげれば、Der Vater. Roman eines Königs (erstmalig erschienen 1937 mit dem Untertitel, Der Roman des Soldatenkönigs). Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1977.; Überwindung. Tagebücher und Aufzeichnungen aus dem Kriege. Hrsg. v. Hildegard Klepper. Evangelische Buchgemeinde, Stuttgart, 1958.; Kyrie. Geistliche Lieder (1938). In: Ziel der Zeit. Die gesammelte Gedichte. Eckart Verlag, Witten u. Berlin, 1962.; Briefwechsel 1925-1942. Hrsg. v. E. G. Riemenschneider. Deutscher Verlags-Anstalt, Stuttgart, 1973. 生うたかや第三帝国時代の彼の距離とくつは J. Klepper. Dichter und Zeuge. Ein Lebensbild gestaltet von Ilse Jonas. Evangelische Verlagsanstalt, Berlin, 1966.; H. R. Klienenberger (編) S. 81-107.